



A SEARCH FOR SELF
**戦火と対峙する
 レバノン女性**

PHOTOGRAPHS BY RANIA MATAR

2025年、レバノンは内戦勃発から50年を迎えた。政治不安や経済危機、20年のベイルート港爆発事故を経て、今なお社会の混乱は続いている。この「美しくも壊れた国」で生きる若い女性は、ある問いを抱えている。「私はどこへ向かうべきなのか」と。内戦中、20歳の時に母国を離れた写真家のラニア・マタルは、「どこへ行くか、去るか」のはざまに揺れる今のレバノンの女性に自らの過去を重ね、撮影を続けてきた。その記録の成果が新作写真集『私はど

こへ? (Where Do I Go?)』(カフ・ブックス刊)だ。被写体の女性は、単にレンズを向けられる存在ではない。マタルが「協働」と呼ぶ制作プロセスにおいて、自ら撮影場所を選び、見せ方を決めた。閉鎖された劇場や廃墟、弾痕が残る壁などは、彼女の内面を投影している。現在、イラン情勢の悪化でレバノンは再び戦火の渦中にある。女性のまなざしには、激動の中にあっても失われな

【N】

レア/アレイのグランド・ジェベイリー・ホテル(2023)

1926年にベイルートの商人が建設したこのホテルは、避暑地アレイを見下ろす丘の上に立つ。華やかな黄金期を経てフランスによる占領からレバノン内戦に至るまで、時代の荒波をくぐり抜けてきた。レアが足を踏み入れたのはバーかカジノのような場所。彼女は自然と溶け込み、その空間と「対話」をした



デミ / プルマナの廃墟 (2021)

デミは2020年8月4日のベイルート港爆発事故で負傷した。事故から1年を迎える日の前日、彼女が撮影場所として提案したのがこの場所だ。「ガラスの破片の一つ一つが、ベイルートから遠く離れたこの山あいの地でも、あの日の記憶を呼び覚ました。この空間はカタルシスをもたらしてくれた」



マヤ / ベイルートの自宅 (2024)

この写真を撮影した当時、レバノン南部では激しい戦闘が展開されていたが、ベイルートでは不気味なほど日常が続いていた。この1枚は、そうした不条理な世界にいる感覚を象徴している。周囲の現実から身を守るように頭を髪で覆うマヤは、絵画の中の女性のように身を横たえている



シェルミン / ベイルートの廃墟 (2022)

この建物はシェルミンが育った場所のすぐ隣にある。一部は修復されつつあるものの、破壊されたまま放置されている。偶然にも建物の色が彼女の服とマッチしていた。全ての若い女性が壊滅的な現状と共に生きることを余儀なくされているように、シェルミンもまた、その傷痕と対峙している



▶ Photographs from "Where Do I Go?" by Rania Matar, published by Kaph Books | —

撮影:ラニア・マタル レバノンで生まれ育ち、1984年にアメリカへ移住。思春期の少女や女性の肖像写真を通して個人的、集団的アイデンティティを探究する。本作は新作写真集「私はどこへ? (Where Do I Go?)」(カフ・ブックス刊)に収録。同名の写真展が米インディアナ大学シドニー・アンド・ロイス・エスケナジ美術館で開催中(8月2日まで)

ベトラ / バイルートのホリデー・イン (2021)

このホテルはレバノン内戦中に砲撃を受け、全ての客室が焼き尽くされた。建物は今もバイルートの街にそびえ立つ。全28階が焼け焦げた抜け殻のようなその姿は、戦争の痛ましい象徴だ。弾痕が残る空のプールに立つベトラは、どこかはおかしく、小さく見える



リアナ / アムシートの海岸 (2024)

リアナにとって、レバノン北部のこの海岸線はかけがえのない場所だった。そこへ向かう途中で見つけた1枚の割れた鏡を、彼女はごく自然に空へと掲げた。本能的なしぐさだったが、その姿が語りかけるメッセージは心に突き刺さるような強烈なものだった

ファラ / アーベイの自宅 (2020)

ファラは2019年10月に始まった大規模な反政府デモに参加した。デモを妨害しようとする勢力によって、彼女の車は焼き払われた。ファラは車を自宅まで牽引し、スクラップ場へ送られる前に記録に残そうと撮影に臨んだ。それは1つの抵抗の証だった

